

逆に『契丹国志』州県載記・『遼史』地理志には成州はあるが陸州はない。そのため、成州は陸州の改名とされてきたが、『蕭琳墓誌』は陸州が蕭思温家族分地に属する頭下州であったことを明記し、成州とは異なることを証明した。

本書収録の石刻文には『遼史』百官志に無い官職が頻見し、遼代官制史研究に確実な材料を提供する。また、本書収録の石刻文は『遼史』の多くの錯誤を訂正する。たとえば『遼史』皇子表は姜氏が聖宗の第六子侯古を生んだとするが、『聖宗淑儀贈寂善大師墓誌』に拠れば、宗願（侯古）を生んだのは淑儀耿氏（耿崇美の孫）であって姜氏ではない。また、『遼史』公主表は、聖宗の長女を燕哥とするが、『蕭受墓誌』は聖宗の長女を蕭受の母親とし燕哥とはしない。契丹文墓誌から彼女が聖宗の庶長女で、公主表では第六に並べられた細匿であることがわかる（『愛新覺羅烏拉熙春女真契丹学研究』、松香堂、二〇〇九年）。本書は石刻文に新式標点を採用し、人物・事件・官制・地名などに漏れなく注釈を施し、『遼史』の缺略錯誤を逐一指摘する。本書は貴重な出土資料を保

存するだけでなく、『遼史』に対する補缺正誤をも達成している。

遼史研究の不断の深化にともない、遼代石刻文はその価値をいよいよ高めるであろう。三編・四編が引き続き世に問われることを切望するものである。

（一六開 三七六頁 二〇一〇年一月）

遼寧人民出版社 四八元

吉本智恵子 立命館アジア太平洋大学教授

クリストファー・ケリー著

（藤井崇訳・南川高志解説）

『ローマ帝国』

本書は Christopher Kelly, *The Roman Empire: A Very Short Introduction* (Oxford, 2006) の全訳であり、岩波書店から翻訳・刊行されている「1冊でわかる」シリーズの一書である。著者はいわゆる「古代末期」を専門として、これまで後期ローマ帝国の官僚制やフン族の王アッティラを扱った書物を公にしてきた。本書では、紀元前一世紀から紀元二世紀までのローマ帝国の

歴史が語られる。

かつて著者はある席上、ローマ史を研究する理由は「現代のアメリカに似ているからだ」と答えたことがある。その著者にとって、いまローマ帝国の通史を書くということはいかなる意味を持つのか。まずは、本書の内容を紹介していこう。

第一章「征服」ではローマが都市国家から帝国へと拡大していく過程が論じられる。共和政から帝政への移行は、権力闘争を規制する方法の変化に過ぎない、あるいは残酷な軍事行動の背景には、それを正当化する「帝国の使命」と呼ぶべきものが存在したといった指摘がなされる。

第二章「皇帝の権力」では、皇帝権力を浸透させるための皇帝のイメージと歴史書に描かれる皇帝のイメージに焦点が当てられる。前者のイメージは各都市で行われた皇帝礼拝の中に神の姿として現れる。一方、スエトニウスやタキトゥスの歴史書の中では、批判的な筆致の中からあるべき皇帝の姿が浮かび上がる。双方のイメージを合わせて、多角的に皇帝イメージをとらえるべきだとされる。

第三章「共犯」では、属州統治の実態が

取り上げられる。属州行政にあたった官吏は極端に少ない数であったが、それを補ったのは、各都市の自治を担った地方エリート層であった。帝国政府側は被征服地域のエリート層をローマの支配階層として再編成しようとし、地方エリート側もそれを利用したという関係が描き出される。

第四章「歴史をめぐる戦争」では、ローマ時代における過去、すなわち往時のギリシアがいかに理解・利用されたかということが論じられる。まず、ハドリアヌスによるギリシアの過去の改変が取り上げられ、それに対して、「本来のギリシア」にこだわるパウサニアス、そしてギリシア的な倫理観にもとづいて判断を下す対比列伝をものしたブルタルコスに言及される。

第五章「キリスト教徒をライオンに」では、帝国の内から生まれ、やがては帝国を飲み込むことになるキリスト教が題材。まず、見世物の一環として行われるキリスト教徒の処刑をとりあげ、それがキリスト教徒にとっては、ローマ人に対抗し自らの信念を誇示する重要な場であったことが述べられる。このような迫害にもかかわらずキリスト教が根絶されなかったのは、彼らが

啓典（文書）に基礎を置く集団であったためであるという。

第六章「ローマ人の生と死」では人々の生活へと視点が移る。ポンペイに残される邸宅の設計・装飾に見られる工夫からは、それが人々に見られることを意識したものであったことが分かる。また、生死に関するローマ社会の特色として、死が身近な社会であったこと、女性の出産能力に対する高い負担があったことなどが指摘される。さらに、人口のほとんどを占めるのは、土地を耕し、そこに暮らす人々であり、彼らに目を向けることを忘れてはいけないと注意を促す。

最後に第七章「ローマ再訪」では、時代を超えて近代と現代におけるローマ帝国への理解に注目する。一九世紀後半から二〇世紀初頭、帝国主義のただ中にあつたイギリスでは、自らとローマ帝国主義とを重ね合わせる厄介な議論がなされていた。一方ムッソリーニは、古代ローマの精神をファシズムが体現していると主張したが、この背景には自分たちが古代ローマの理念の後継者であり復興者なのだという意識があつたのである。

しかし戦後のハリウッド映画では、ローマ帝国の位置づけが一転する。五〇年代のハリウッドにとつて、ローマ帝国は悪の帝国であり、それに抗い勝利するのが、キリスト教的価値観なのであつた。

これらさまざまに描かれるローマの姿は、むしろ各時代で何が大切に思われ、何が問題だと考えられたのか、それを明らかにするものであるとして著者は筆を擱く。

以上が本書の内容である。その最大の特色は、時系列ではなく、テーマに沿って記述されるスタイルにある。主に一般の読者に向けて書かれた書物として、この選択は非常に有効に機能している。また、本書の随所で見られる、現代社会とのアナロジーの指摘は、著者の問題意識から発したもののか。安易なアナロジーの指摘は、ローマ社会のものであれ、現代社会のものである、問題の本質を見誤らせてしまうが、著者はこの危険性を十分に認識している。さらに、「1冊でわかる」式の書物でありながら、読者が一面的な理解に陥らないように常に配慮されている点は書き手として見習うべきであろう。

やや違和感を覚えたのは、各章で取り上

げられる事例が東方世界中心であったことである。このことは読者にローマ帝国の広がりを意識させる効果もあるが、かえって偏った印象を与えかねないとの危惧を抱いた。

しかしながら、このような瑕疵はささいなものにすぎない。著者が設定したテーマを貫くのは、ローマ（皇帝、過去としてのギリシア、キリスト教徒）が、いかに認識されたのかという問いである。そしてこれは、とりもなおさず、いま私たちがこれらをいかに認識するのかと問いかけてくる。ローマ史を研究すること、歴史を研究すること、それを通じて何を現代社会に対して提示するか、著者の姿勢を通じてさまざまに考えさせられる一書である。

最後に、翻訳調ではない読みやすい訳文と、丁寧な解説・読書案内が本書の価値を高めていることも付言しておきたい。

(B6版 一三六頁 岩波書店)

二〇一〇年二月 税別一八〇〇円)

(佐野光彦 京都女子大学非常勤講師)

受 贈 誌

(二〇一〇年三月二六日)

二〇一〇年四月一五日)

RITSUMEIKAN LAW REVIEW (The

Ritsumeikan University Law Association) 二七

一橋研究 (一橋大学大学院一橋研究編集委員会) 三四—四 (通巻一六五)

日本歴史 (日本歴史学編集) 七四三

栃木史学 (國學院大學栃木短期大学史学会) 二四

地域アカデミー 公開講座報告書 (広島大学大学院文学研究科歴史文化学講座) 二〇〇九

新潟県立歴史博物館研究紀要 (新潟県立歴史博物館) 一〇

古代文化 (古代学協会) 六一—四

国立歴史民俗博物館研究報告 (国立歴史民俗博物館) 一五五

国立歴史民俗博物館研究報告 (国立歴史民俗博物館) 一五六

愛知大学文学論叢 (愛知大学文学会) 一四

同朋大學論叢 (同朋夕大学同朋学会) 九四
史學雜誌 (史學會 (東京大学文学部内))
一一九—三

一一九—三

上海センター研究年報 東アジア経済研究 (京都大学大学院経済学研究科 附属上海センター) 二〇〇七

上海センター研究年報 東アジア経済研究 (京都大学大学院経済学研究科 附属上海センター) 二〇〇八—三

大東市史編纂史料目録 (大東市教育委員会) 第三集 新田村庄屋文書

大東市史編纂史料目録 (大東市教育委員会) 第四集 東家文書

東洋文化 (東京大学東洋文化研究所) 九〇

国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査概報 (大分県立歴史博物館) 豊後国山香郷一

社会学年誌 (早稲田社会学会) 五一

日本常民文化紀要 (成城大学大学院文学研究科) 二八

東洋史研究 (東洋史研究会) 六八/四

経済論究 (九州大学大学院経済学会) 二三

六

社会経済史学 (社会経済史学会) 七五—三

日本学刊 JAPANESE STUDIES (中国社会科学院日本研究所中華日本学会) 二

二